

編集後記

物語体のテキストにおいて「誰が話しているのか」という問いをめぐる研究や論争に以前から個人的に興味があったこともあって、フランス文学科の同僚と共に、今年「語りの声」をテーマに特集をくむこととした。文学理論における叙法とのかかわり、話法の言語学的研究、作家の文体を形成する一要素、朗読の作用や作詞法の教育といった具合に関心の在処は多義にわたっているが、これも「声」が語りの異なる問題を包括的に示すタームであることを反映しているといえよう。それぞれの論考を読んでいただければ、この特集の趣旨が浮き上がってくるに違いないと確信し、興味深い論述を寄稿していただいた方々に編集者として改めて感謝する次第である。

言語文化研究所の二〇一七年度の活動

について、ここで簡単な紹介をさせていただこう。六月二日には、広島大学名誉教授伊藤詔子先生を招き、「オバマ大統領ヒロシマ声明と二十一世紀の女性環境作家たち」と題された講演会が行われ、一七日には、芸術学科演劇身体表現コース開設記念として、芸術学科教授岡本章先生の演出による、舞踏、能楽とコルテスの戯曲を融合した演劇が催され、いずれもたいへん盛況であった。九月二十七日には、演出を手掛ける小原花さんと即興ピアニストの榎政則さんによる即興朗読デュオ『空箱』が、ピアノの即興演奏とフランス語と日本語が交わる声によるコラボレーション作品が上演された。また、今年の三月八日には、歴史と感情の社会学を専門とし、現代の資本主義における消費と生産の支配による感情の仕組みの

変容についての研究者であるフランス国立社会科学高等研究所研究主任エヴァ・イルーズ先生を迎えて、『資本主義と感情』をテーマにした講演が予定されている。さらに、十二日には、英文学科の貞廣真紀先生によつて、「トランスレーション・アダプテーション・インタージェンチアリティ」をめぐるシンポジウムが開かれることとなっている。

なお、今年新規の読書会として、フランスの若手研究者ラウル・ドルマズール氏に依頼して、一年にわたつて実施されたベレック研究会について触れたい。『物の時代』が出版されて五十年経ち、プレイヤード版で出版され、多くの初期作品や未出版の草稿が明るみにでた今日だが、二十世紀後半文学の諸問題の核心にあると認められ、フランスと他の国の多くの現代作家にとつて避けて通れないジュルジュ・ペレックの作品を再読し、先駆者や同時代の作家や思想家に対して位置づけることを趣旨としたこの研究会は、ベレック研究者・翻訳者の塩塚秀一郎先生

をはじめ、哲学、絵画、音楽、映画とのかかわりについて多くのゲストの発表があり、実に実り多い集まりとなった。

来年度からはホームページも大幅にリニューアルされる。情報の提供が改善され、研究所の利用者の増加につながることを期待している。すでにいくつかの講演・シンポジウムが企画されているが、よそではなかなか教われない言語講座など、新たな研究会や読書会が開かれる機会になることを願うばかりである。

追記・残念ながら急病のため、三月八日に予定されていたエヴァ・イルース氏の講演会は取りやめとなった。

(ジャック・レヴィ)